

我ながら独占欲の塊だな、と思う。でも好きなのだから仕方ない。好きな相手のことは近くにおいておきたいし、何でも知っておきたい。

古都のことを見ていて、不安を覚えることは多々あった。しつかり者だし成績もいい……なのに、目を離れたらふらっと消えてしまいそうな雰囲気もあって。それに加えて、先日の古都の様子。授業中にぼうつとするなんて初めてだったし、その表情は何か思い悩んでいるようにも見えた。当然三年生は今、就職だの進学だのと悩みの多い時期でもある。それは分かっているのだけれど、何かを抱えているだろうことは明白なのに、頑なに口を閉ざす……わけでもなく、表面だけを話して聞かせるその様子が余計に心配だった。

数学準備室を出て、向かうは体育準備室。この時間なら古都のクラスの体育担当はそこで授業計画を考えているはずだった。

「こんにちは」

「ああ、神谷先生。珍しい。どうされましたか」

体育の吉本は体育教諭らしい爽やかさで招いてくれた。勧めてくれたパイプ椅子に腰を下ろす。

「お忙しいところすみません。ちょっと吉本先生にお聞きしたいことがあります」

「はい、何でしょう」

吉本が少し身体を揺らしただけで椅子が悲鳴を上げた。がたいがいい。家でも筋トレに励んでいるタイプだ。

「もうすぐプールの季節でしょう。水の事故の防ぎ方について、ちょっとお尋ねしておきたい」

「事故の防ぎ方、ですか」

数学に全く関係のない質問への訝しさ……というより、単に不思議そうな顔だった。何かを企んでいるとは思われていないようだ。

「ええ。先日大雨があったでしょう。私は災害時の備蓄品の担当をしているんですが、大雨による河川の氾濫等が起きたときに、生徒や教師も冷静に対応できる方がいいんじゃないかと思ひまして。それに使えるような備品があるのなら、と」

「ああ、そうでしたか。そうですね、先日の雨は本当に怖かった。私もバス停まで生徒を送りましたが、特に女の子や背が低い生徒は十センチほどの流水でも足を掬われそうになってしまう」

転びそうになった女生徒を支えるとき、一瞬「セクハラ」という単語が浮かんでしまいました。と、と吉本は困ったように笑った。

「ああ、そういう不安もありますね。非常時だから、と思うのが一般論かと思いますが、全ての生徒が同じように考えられるわけでもありません」

「そうなんです。まあ幸い『先生ナイス！』と言ってくれる生徒だったのでよかったです。が、やはり流れる水の中を歩くというのは私のようなものでも怖いものです」

「そうですね。それに今回は早めの下校ができましたが、次に必ずしも同じようにできるとも限りませんから」

先日はタイミングがよかった。まだ全クラス授業中だったのだ。これもしクラスによっては下校している、というような時間だったり部活中だったら、人数を把握することすら難しい。

「確かに考えておいた方がいいですね。場合によっては不測の事態を想定して水中を歩く練習をプールでしておくなんていうのもありかもしれません」

熱心な先生だ。今話した内容は全てが思いつきというわけでもないけれど、こうして真剣に考えてくれるところを見ると好感が持てる。

「台風も大型のものが年々増えてきていますし、取り急ぎ巣立っていく三年生から、と思うんですが」

「そうですね、それに一年生はまだ高校に上がったばかりで小さい子もおりますし、試験的に三年生から、というのは私も賛成です」

どうやらいい流れを作れたようだ。しかし怪しまれぬよう気を引き締めて続ける。

「三年は……全員プールの授業をきちんと受けていますか？」

「まあ……」

突然の話題転換に、やはり吉本は不思議そうな顔をした。

「そうですね。水恐怖症や水アレルギーがいれば別途非常時対応が必要かなと思ひまして」

「ああ、そうでしたか。そうですね、今のところ——あ、いや、一人プールの授業を受けない子がおります」

「いるんですか」

「ええ。と言っても水アレルギーではありません。水恐怖症というわけでもないようなんです……」

「何か事情が……?」

吉本は考えるように顎に手をやった。そして視線を逸らし、しばし黙る。

「——ここだけの話にしてくださいませるか」

「ええ、もちろん」

個人情報への壁か。それとも、特別対応をしていることへのやましさなのか——どうやらそれは後者だったようだ。恐る恐るといった様子で口を開く。

「古都なんです、どうやら身体に傷があるようでして」

「傷」

「ええ……私の大学時代の先輩が古都の出身で中学で体育の教師をしております。プールにときにひどい傷があったとかで……今はもう完治はしているようですが、火傷の痕に紫外線はよくありませんから。それに見た目も気になるようで」

「そうですか……中学生の頃からということとは……可哀想に。火事とかでしょうか」

「いえ……どうやら事故のようです。弟は普通にプールを楽しんでいたと聞きました」

「え」

「はい?」

「あ、いえ……」

つい弟という言葉に反応してしまった。「弟がいるんですね」と返すと、吉本は頷いた。

「双子らしいですよ。だから弟がプールに入っているのをいつも見ていたと」

言葉が頭に入った瞬間、感じるより先に動悸がした。

(双子……?)

古都は「弟」と言っていた。双子なんて一度も——それに、年下だからこそ親の引越しについて行った……いや、考えてみればそのような言い方はしていなかった。

『両親と、弟が』

『はい。でも僕は学校に合格したので』

そう言ったただけだ。年が離れているとも何とも言っていないかった。でも弟と言われ、引越しについていったと聞かされたので無意識のうちに年下だろうと思ってしまうていた。

「神谷先生? どうしました?」

「あ……いえ、でもそれなら……どちらにしても訓練は着衣ですから問題はありませぬね」

「ええ、そう思います。ただ濡れてもいい恰好をさせる必要がありますね」

「靴は使いまわして、服はジャージでいいでしょう」

「ああ、それなら確かに」

それから数分打ち合わせをして退室した。けれどもう、決まった話など全て頭から抜け落ちていた。

(双子……)

古都の話をうまく聞き出せるかどうかは賭けだった。だから聞ければラッキーくらいの気持ちでいた。でもまさか、ここまではつきりと隠し事をされていたことを知ってしまうことになるとは。

~~~~~

「……僕、先生に嘘を吐いていました」

「嘘……？」

先生の顔から表情がなくなった。いや、ショックを受けた表情になったのか。それはそうだろう。だって先生は「隠し事」をされていると思っていたのだ。なのに「嘘を吐いていました」なんて。

「ごめんなさい……」

「……どんな嘘？ 話してくれるのかな」

先生が無理矢理笑顔を作った。でも目は笑っていない。その表情が怖かった。いつも優しい先生の、強引な作り笑い。でもそんな顔をさせたのは自分だ。責任は自分で取らなくては

——例えこれで、嫌われてしまったとしても。

「……えっと……」

先生にはなんて説明していたんだっただか。嘘を吐きすぎて、細かいところはもう忘れてしまった。最低。

「……家族のことなんですけど」

「うん」

「本当は捨てられたんです」

「え……でもそれは……」

「被害妄想って言いました。でも事実です」

「……本当に？」

「入学式の日、帰宅したらいなくなっていました」

そこからは事実を全て話した。先生は一言も口を挟まず、でも言葉が出なくなったときは励ますように手を握ってくれた。

「——そう……」

「ごめんなさい」

「いや……それは言いにくいよ。言えなくてもしかたがない」

「……先生……」

虚勢を張らないと崩れてしまうこともあるからね、という言葉がストンと胸に落ちた。

(そっか……僕……)

きっと先生が言うように虚勢を張っていたのだ——と、気付いたら崩れ落ちそうになった。

「僕……僕……」

人に話す度、胸が痛んだ。話す度と言ってもまだたった二回、谷口先生に話したのと今のこの時間だけなのに、言葉にするとそれが現実なのだ自分が知ってしまったような気がした。目を背けていた現実と強引に向かい合わせにされたような。でも、話したのは自分だ。自分の意思で話したのに、まるで自分に傷付けられたような気持ちになった。

「僕……捨て……」

捨てられた——心の中では、頭では理解していたつもりだった。でも言葉にすると、こんなにも重く苦しい。

「古都」

「あ……あ……」

どうして捨てられたのだろう。

(どうして……僕……?)

弟は双子だったのに。同じ顔、同じ身長——でも確かに性格は違っていたのかもしれない。弟は明るくて活発で、友達も多くて。対して自分は暗くて友達もほとんどできなかった。それでも弟は友達だと思っていた。兄弟というより友達。なのに——。

「古都」

ぐっと引き寄せられ、強く抱きしめられる。普段なら嬉しいはずのそれも、心は重く沈み、痛みが引く気配はない。

「せん……」

「ごめん。もう思い出さなくていい。嫌なことを話させたね、本当にごめん」

「あ……僕……」

一体何が言いたいのか自分でもよく分からなかった。でも先生は悪くないと、それだけは分かってほしかった。

「先生は……。僕が、僕が……」

「古都」

「僕が、ちゃんと向かい合ってこなかったから、だから……」

友達もおらず、誰かに一人暮らしの理由を訊かれることもなくここまで来た。クラスメイトが教室で家族の話をしていても、友達がいないから話題に困るということもなくて。だから、二年以上も現実から目を背けてしまっていた。

「古都、それは悪いことじゃない」

「え……？」

「それはね、古都が自分を守るためにしたことなんだよ。人間は、全てを受け入れられるようになってきていないから」

「……でも……」

それは無責任だ。いや、他の人はそうしていい。でも自分がそうするのはダメな気がした。

「でも、僕は……」

でも僕は——何なのだろう。言葉が浮かんでこない。だって、捨てられた理由は何一つ浮かばなかったから。分からなかったから。

「……だから、」

「古都？」

「分からないから……だから捨てられた……」

これだ、と思った。

「古都？ 何が、」

「……僕……捨てられた理由が分からなくて。でも、分からないような奴だから捨てられたんですよね」

「古都——」

「はは……」

分かったら笑えてきた。胸はさつきから張り裂けそうなほど痛んでいる。でもその痛みさえ自業自得だと思えば受け入れることができる。

「馬鹿みたい……なんで捨てられたのか分からなくて、だから捨てられたこと自体から目を

背けて……それが原因だったかもしれないのに」

もし何かが違っていたら、家族のうち誰か一人くらいは味方になってくれたかもしれない。でも三人全員が古都を捨てることに同意したのだ。全員に嫌われるなんて、よほど性格が悪いということ。

「古都、違う。違うよ、古都」

「違うんです。だって……」

それじゃ説明がつかない。いや、もしかして自分が忘れてしまっただけなのかもしれない。何か、家族を傷付けるようなことをしてしまっていたとか。なのにその自覚がないせいで記憶にない——最低だ。何だろうと、結局自分が悪い。なのに「捨てられた」なんて被害者ぶって。

「捨てられたんじゃない……逃げたんだ……」

「古都——？」

「はは……」

捨てられたんじゃない。家族が自分から逃げたのだ。ただそれだけのこと。それなのに、それでもせめてと置いて行ってくれたお金を「手切れ金」と思うなんて。

(そんなんだから……だから嫌われたんだ……)

そんな最低な人間の保証人を谷口先生にさせるわけにはいかない。神谷先生は……恋人になる前でよかった。先生の恋人歴に傷をつけてしまうところだった。

「……帰ります。すみませんでした」

「古都、」

胸を押せば、身体は呆気ないほど簡単に離れた。きっと先生も古都のクズさに気付いたのだ——そうだ、だから友達ができなかったのだ。同級生と一緒に過ごす時間が長いから古都の本質に気付いていたのだろう。でも、先生は担任でもなくただの教科担当だったから気付かなかった。

「……さようなら」

ハピエンです！

後編5万2千文字

someone

製本版にはエビログ入り